

平成二十九年年度

# 日本近世文学会秋季大会

## ・大会プログラム ・研究発表要旨

期日 十一月十八日(土)・十九日(日)・二十日(月)

会場 鹿児島大学郡元キャンパス(学習交流プラザ)

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元一―二一―三〇

- 一、出欠の葉書を十月十三日(金)必着でお出しく下さい。欠席の場合も、名簿台帳の資料といたしますので、必ず投函してください。
- 一、出張依頼状を御入用の方は、職名・提出先及び期間を明記の上、学生会事務局(学習院大学文学部)へお申し出ください。
- 一、大会経費は、参加費千円、懇親会費六千円です。
- 一、送金は同封の振替用紙(口座番号〇一七五〇―九一―四六四二四、口座名「日本近世文学会秋季鹿児島大学大会」)で、十月十三日(金)までに振り込みをお願いいたします。なお、振替用紙には、必ず内訳を御記入ください。参加費のみの方は、当日会場でも申し受けます。
- 一、大会二日目(十一月十九日)日曜日の昼食に弁当(千円)を用意いたしますので、ご希望の方は同封の振替用紙でご送金ください。
- 一、大会に不参加で、発表資料をご希望の方は、出欠葉書の当該欄に御記入の上、同封の振替用紙にて、資料請求代千円を払い込んでください。大会終了後、資料を郵送いたします。
- 一、三日目(十一月二十日)の文学実地踏査は、特に専用貸切バス等の用意はいたしません。資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りにください。
- 一、同封の振替用紙による年会費の振り込みはできません。年会費の振込用紙は『近世文藝』の末尾に綴じ込んでいます。
- 一、宿泊等については、各自、早めにご手配ください。
- 一、会場受付にて「託児料金補助申請書」を配布いたします。該当する会員の方はお受け取りください。
- 一、お急ぎの御用は左記へ御連絡ください。

日本近世文学会秋季鹿児島大学大会事務局

鹿児島大学法文学部人文学科 日本近世文学研究室 丹羽謙治

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元一―二一―三〇

電話 〇九九―二八五―八九〇四(直通)

メールアドレス niwa@eh.kagoshima-u.ac.jp

# 日本近世文学会秋季大会のご案内

会員の皆様には時下ますますご清祥のことと存じます。

さて、平成二十九年度秋季大会を左記の通り開催いたしますので、ご案内申し上げます。

平成二十九年九月三十日

日本近世文学会秋季大会会場校代表 丹羽謙治  
日本近世文学会事務局代表 鈴木健一

## 〔事務局連絡先〕

〒171-8588 東京都豊島区目白一―五―一  
学習院大学文学部日本語日本文学科

鈴木健一研究室

電話 〇三―五九〇四―九二九一

FAX 〇三―五九九二―九三二七

e-mail info@kinseibungakukai.com

## 〔会場〕鹿兒島大学郡元キャンパス

## 〔行事〕

第一日 十一月十八日(土)

委員会 (二・二〇〇～三・四〇)

委員会会場 総合教育研究棟(文系) 二階二〇三講義室

大会受付 (二・三・〇〇)

開会時間 (二・四・〇〇)

講演 (二・四・一〇～一七・〇五)

講演会場 学習交流プラザ二階学習交流ホール

1 藩主島津斉興像を問いなおす―島津家第二十七世としての文武の実践―

2 西郷隆盛と文学

立教大学教授 鈴木 彰  
志學館大学教授・鹿兒島県立図書館長 原 口 泉

懇親会 (二七・三〇～一九・三〇)

懇親会場 学習交流プラザ一階学習ラウンジ1

第二日 十一月十九日(日)

大会受付(九・三〇)

研究発表会 午前の部(一〇・〇〇～二二・一〇)

研究発表会会場 学習交流プラザ二階学習交流ホール

1 梅暮里谷峨『斯波遠説七長臣』小考

2 「中本」受容と大島屋伝右衛門―版元、そして貸本問屋として―

3 『忠臣水滸伝』と『忠臣蔵演義』―『仮名手本忠臣蔵』の白話訳をめぐる―

4 姫路騒動実録の生成と展開

昼 休 み(二二・一〇～三三・三〇)

編集委員会会場 学習交流プラザ二階グループ学習室5

研究発表会 午後の部(一三・三〇～一五・四〇)

研究発表会会場 学習交流プラザ二階学習交流ホール

5 新出版 都の錦『好色堪忍ぶくろ』をめぐる諸問題

6 『鹿驚集』をめぐる諸問題

7 宗因における出家とその意味

8 芭蕉俳論と邵康節

閉 会(一五・四〇)

第三日 十一月二十日(月)

文学実施踏査 資料を用意いたしますので、各自・各グループでお回りください。

図書展示 「女性たちの明治維新」展

日時 十一月二日(木)～十一月二十六日(日) 平日・九時～一七時、土曜日・日曜日…一〇時～一七時

場所 鹿児島大学附属図書館一階アトリウム

駒澤大学(院) 小笠原 広 安

中央大学(院) 松 永 瑠 成

信州大学 闊 小 妹

島根大学 田 中 則 雄

日本女子大学(非) 宮 本 祐 規 子

実践女子大学 佐 藤 千 悟

山口大学 尾 崎 千 佳

佐賀大学名誉教授 井 上 敏 幸

# 梅暮里谷峨『斯波遠説七長臣』小考

駒澤大学(院) 小笠原 広 安

梅暮里谷峨は『傾城買二筋道』をはじめとする洒落本作者として知られる。しかし谷峨は晩年、読本・人情本なども著しており、その執筆ジャンルは多岐に亘る。そこで本発表では、従来あまり触れられてこなかった谷峨の読本『斯波遠説七長臣』について検討したい。

本作は江戸・大嶋屋伝右衛門ほか三都計七書肆によって刊行された五巻六冊の読本であるが、刊年が記されず、序文に文政三年秋九月とあることから、これまで文政三年(辰)刊行とされてきた。しかし巻末に、文永堂(大嶋屋伝右衛門)により「此書は前篇四巻にして巳の春陽に売出さんとせしゆゑに画工は四の巻にて筆をとゞめぬ。さりけれども(中略)発市のきはにいたりて忽に二巻をましたれば」と記された書があり(駒澤大学本等)、文政四年以降の刊行であったことは明らかである。また、巻五(上・下)について「画も亦刀匠を選にいたらず國直が病にそみて全く画ず、英泉が忽卒に補画」という、当時の絵師の状況も窺える。

確かに本作は一般的な読本の形式とは異なり、口絵を巻一のみならず巻四、巻五にも持つという特徴を持つ。また内容を見てもみると、巻四で物語は一区切りとなり、巻五からはそれまでに語られた御家騒動についての評定の場面となっており、巻四までとは全く趣を異にする。以上を踏まえ、このような本作の特徴を分析し、読本史上における位置について考察したい。

# 「中本」受容と大嶋屋伝右衛門

— 版元、そして貸本問屋として —

中央大学(院) 松 永 瑠 成

戯作を中心とする近世後期の通俗小説は、主に貸本屋をとおりて人々に受容されていた。その様子は、長友千代治氏を筆頭に進められてきた貸本文化研究に詳しい。しかし、貸本に供される書籍が、どのようにして版元から貸本屋へ供給されていたのか、それを具体的に示した研究はこれまでほとんどなかった。

そこで本発表では、貸本に供される書籍のうち、特に滑稽本や人情本といった中本の版元・貸本屋間における流通を明らかにするため、書肆文永堂大嶋屋伝右衛門に注目する。

大嶋屋は、為永春水作『春色梅児誉美』をはじめとする「梅曆シリーズ」や、滝亭鯉丈作『花曆八笑人』等の版元であるが、自身の蔵版する書籍を明治期まで印行し、世に送り出していた。こうした営業の実態からは、大嶋屋の貸本問屋としての一面がほの見える。

貸本問屋については、すでに前田愛氏が丁子屋平兵衛・大嶋屋伝右衛門・大川屋錠吉らの名をあげ、その営業に触れている(『明治初期戯作出版の動向―近世出版機構の解体』『前田愛著作集』第二巻所収)。だが、その実態は未だ具体的に明らかにできてはいない。本発表では、書籍に附載された蔵版目録等から作成したリストに基づく調査によって、それらの書籍流通を明らかにし、貸本問屋という機構の一つの事例を提示する。そして、版元、また貸本問屋として、大嶋屋が近世後期から明治初期に至る人々の「中本」受容を支えていたことを論じる。

# 『忠臣水滸伝』と『忠臣蔵演義』

— 『仮名手本忠臣蔵』の白話訳をめぐって —

信州大学 闊 小 妹

江戸長編読本の第一作とされた山東京伝の『忠臣水滸伝』（寛政十一年前篇・享和元年後編刊）は、その書名が端的に示すように、当時流行の中国長編白話小説『水滸伝』と、寛延元年の初演以来浄瑠璃・歌舞伎等で繰り返し上演され、演劇以外にもあまたの影響を与えてきた『仮名手本忠臣蔵』とを撮合して制作されたものである。『水滸伝』と本作との関係については、先学による詳細な比較研究が備わるが、忠臣蔵に関しては、浄瑠璃本以外の典拠について言及されることはなかった。しかし、本文につけば明らかなように、浄瑠璃に拠ったと思われる箇所にもきわめて濃厚な白話的文体が採用されており、京伝が典拠として利用したものが存在した可能性を思わせる。

本発表では、まず、『仮名手本忠臣蔵』の白話訳である『忠臣蔵演義』（早稲田大学蔵写本は、杉村英治「海外奇談—漢訳仮名手本忠臣蔵—」によれば、唐通事周文次右衛門によるものという）を紹介し、『忠臣水滸伝』の本文と比較することにより、京伝が本作執筆にあたってこの白話訳を利用した可能性の高いことを指摘する。『忠臣蔵演義』は、のちに改訂改題されて『忠臣蔵』（文化十二年）として刊行され、さらに『海外奇談』等の名でも再刊されているが、京伝の利用したのがこれらでないこともあわせて報告する。これらを踏まえ、本作の背後に想定される大田南畝、森島中良、亀田鵬斎等との交流についても考察を及ぼしていきたい。

# 姫路騒動実録の生成と展開

島根大学 田 中 則 雄

寛延四年七月、姫路藩酒井家の家老川合勘解由左衛門が同家の犬塚又内と本多民部左衛門を討ち果たして自害した。

この事件を記した実録として知られる『姫陽陰語』は、諸伝本において筋は共通するものの、全体の文章が連続して記される形態から、章段を設け、「……の事」の如き題を付す形態へと整理されつつ、表現も増補されて行ったことが窺える。中でも『志賀磨船』（鳥取県立図書館石谷文庫蔵）は、犬塚又内の奸悪の描写を増補している点で注目される。まず以上の『姫陽陰語』系を概観し、形態の整理や表現の増補のあり方を示す。

一方でこの度『忠臣川合実記』なる実録の存在を知り得た（姫路市立城内図書館蔵）。これは『姫陽陰語』を参照しつつも独自に構想し直して成ったものと認める。川合と犬塚・本多との対立の構図を明示し、何故川合がこの兩人を討ち果たすところまで思い詰めたのか、その心中を辿るように書いている点は、『姫陽陰語』と異なる。また川合が仁愛の士であったことを、寛延二年の姫路大洪水の折の被災者に対する献身的な救済によって描き出すが、このことは地元に残る史料（『姫陽秘鑑』、『姫山君言行録』など）に記すところと合致する。本作は全体にわたり姫路藩の地名・人名や伝承などを取り込んでおり、地元出来と見られる。地方実録の一例として本作を位置付け、事件を知る人々の間で語られた言説や評価が実録へと取り込まれる様を跡付けたい。

## 新出本 都の錦『好色堪忍ぶくろ』をめぐる諸問題

日本女子大学(非) 宮 本 祐規子

都の錦作とされる『好色堪忍ぶくろ』は、江戸を舞台とした好色物浮世草子である。従来二種が知られ、一は、早く長谷川強氏が紹介した京都大学文学研究科図書館所蔵本(巻二以下京大本)。二は、林望氏や中嶋隆氏によって、本作改題本であることが確定されたケンブリッジ大学図書館所蔵本(巻一〜三。以下改題本)である。いずれも完本ではなく、本作の概要は不明な点が多かった。

今回、巻一のみで零本ではあるが、新出本が出現した(拙稿「個人蔵『好色堪忍ぶくろ』の紹介」。初印本かと考えられる新出本には原題簽が残り、上方復帰の意欲が見てとれる序文(都の錦自筆版下)、目録が付されている。

本発表では、薩摩流人時代の宝永二年を示す「宝は永く鳥の年」(新出本)が、埋め木により「宝は永く敷島の」(改題本)とされた改変や、本作の続編『好色堪忍破袋』(宝永八年刊)の奇妙な構成、柱刻の齟齬(長谷川強氏「都の錦の再出発―『好色堪忍破袋』をめぐる』)等も踏まえた上で、本作及び改題本の製作年代とその執筆意図について考察する。

また、新出本序末には無かった署名「喜席軒自省著述」が改題本に付された理由と改題本刊行時期の考証をもとに、自笑と其磧の確執を背景とする其磧名称の商品化について、都の錦及び書肆の関係から論じる。

## 『鹿驚集』をめぐる諸問題

実践女子大学 佐 藤 悟

貞門の俳諧史ともいふべき『滑稽太平記』は、井坂春清と神田貞宣(蝶々子)が春清編『鹿驚集』に予定された千句を巡って争いとなり、出し抜いた貞宣編『物忘草』が江戸における最初の選集の刊行となったことを述べる。両書とも所収句の一部は『詞林金玉集』により知られていたが、その存在は確認されていなかった。しかし『鹿驚集』は二〇〇二年に「日本を見つけた。江戸時代の文華」展において、発句部分(巻一〜巻四)が展示され、『滑稽太平記』の記述がほぼ正しいことが判明した。

『誹諧渡奉公』(延宝四年刊)とそれを踏襲した『誹諧書籍目録』(宝永四年刊)は『鹿驚集』が寛文二年に五冊本として刊行されたことを記す。本発表では以下の点について報告する。

- 一、現存する『鹿驚集』は明暦三年の刊行であること。
- 二、春清は雛屋立圃系の俳人であること。松村正恒、山村保好、奥田本包、門村兼豊、石田未得、貞宣、神野忠知、増井貞三、阿形但秀、岸本友正らが入集していること。
- 三、『玉海集』などと重複する句があること。

- 四、巻一(春の部)は二九丁なのに、巻四(冬の部)は九丁であり、板下も行数が一定せず、全体の編成に不備があること。未だ発見されていない千句部分は、『滑稽太平記』にも言及されるので、巻五以降に相当すること。
- 『誹諧渡奉公』などにも『春清千句』の書名が見えること。

五、江戸における俳壇の様相について。

## 宗因における出家とその意味

山口大学 尾崎 千佳

寛文十年二月十五日、小倉の黄檗僧法雲明洞のもとで受戒出家を遂げた西山宗因が、以後、活動の比重を連歌から俳諧に移していくことについては、野間光辰「西山宗因」以来定説となつて久しいが、その理由をめぐる従来の研究は、出家後の宗因の俳諧を脱俗超世の精神からする高踏的遊芸と説くがとき抽象論に留まつてきた。従つて宗因の内部における連歌と俳諧の意味あいも、いまだ十分に解き明かされていない。

法雲「西翁隠士為僧序」によれば、宗因は、つとに帰依する西行のひそみに倣つて涅槃会に薙髮し、期するところあつて居士号を「西翁」としたという。ただし、宗因が出家の六年以上も前から「西翁」号を使用し、しかも、出家前後のその行動には「隠士」とは評しがたい面もあつた事実を逸してはならない。

本発表では、宗因の出家をめぐる言説を整理したうえで、従来俳号と捉えられてきた「西翁」「梅翁」が、相手の地位や立場に応じた宗因の別号であることを、真蹟を軸とした分析により論証する。連歌か俳諧かという文芸上の問題以上に封建社会の現実を重んじていた宗因にとつて、出家は「西翁」号としての活動拡大のための方便でもあつた。ここに、多様な階層の需要に応えようとする宗因の意識を認め得る。

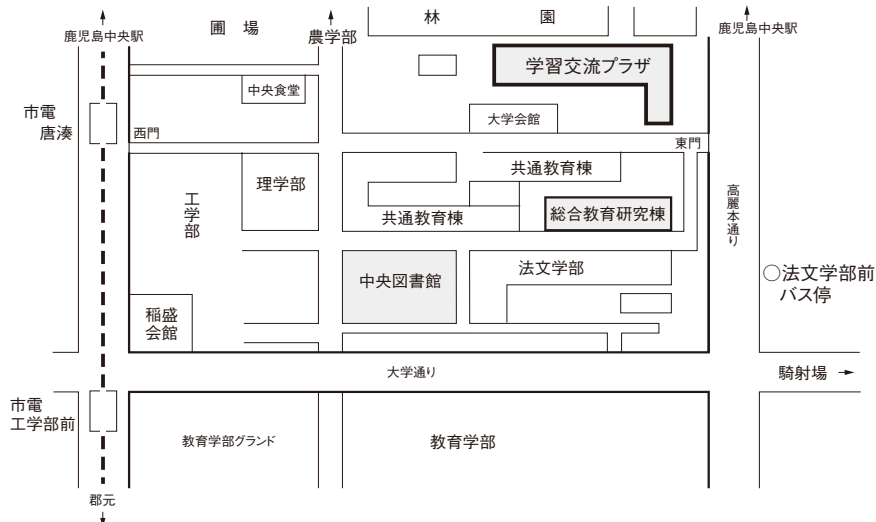
西山宗因全集の完結によりその全詩業を見渡し得るいま、連歌師宗因における俳諧の意味を改めて問い、激動の時代をきたたかに生き抜く新たな宗因像の提出を試みる。

## 芭蕉俳論と邵康節

佐賀大学名誉教授 井上 敏幸

北宋の学者で朱子学に影響を与えた邵康節は『伊川擊壤集』の序文で、自分の詩業を「風雅之道」と呼び、それは「物を見る楽しみ」、つまり「小我を捨て対象と一体となり」切ることで齎らされるものであり、それは「以物観物」方法から得られるものだ、自分の詩作の原理を説明していた。芭蕉は、真享の頃自分の俳諧を「狂句」と称していたが、これは恐らく邵康節が自分の詩を「狂詩」と呼んだことに関連していたかと考えられる。後に邵康節は、自分の詩を「風雅」と称し、完成させた自己の易学思想の境地に立つて、独自の思想詩の世界を展開したのであるが、芭蕉はこの邵康節に倣つて、自己の俳諧の呼称を「風雅」に改め、邵康節の思想詩の論理を取り込むことで、晩年の「風雅の道」の達成に邁進したと考えられる。ところで、邵康節の思想詩の論理は「観物論」であり、具体的には「反観」の手法であつた。「観物論」とは、「以物観物」こと「尽物之性」ことをいい、「反観」とは「不以我観物」、つまり「我」を排除し「理(物)」をもつて物を観ることであつた。周知のごとく芭蕉は、『三冊子』で俳諧論の根本を「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」と説いたのであるが、それは「私意(我)をはなれ」「物(対象)に入つて、その微」が「顕れ」、その「情」を、自分の内の「物」が、感得しえたその瞬間に、「誠の情」が把握され、「誠」の句が成立すると論じていたのである。かくて芭蕉俳論は、この邵康節の詩論によって成り立っていたことが確認できるのである。

# 日本近世文学会鹿児島大学大会会場(学習交流プラザ・総合教育研究棟)詳細図



## 会場へのアクセス

- 鹿児島空港からJR鹿児島中央駅前 約40分(直行便)
  - ・鹿児島市内行き空港リムジンバス:「鹿児島中央駅前」バス停下車
- JR鹿児島中央駅から鹿児島大学 徒歩約20分
  - ・市営バス(11)番線「鴨池港」行きを利用し、「法文学部前」下車徒歩約1分
  - ・鹿児島交通バス19番線「紫原・桜ヶ丘団地」行きを利用し、「法文学部前」下車徒歩1分
  - ・市電2番系統「郡元」行きを利用し、「唐湊」または「工学部前」下車徒歩約5分
  - ・JR指宿枕崎線「郡元駅」下車徒歩約15分

## 会場案内図

